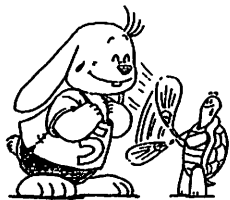


# 都市型生活科確立の 可能性はあるか

## 生活科の“未来”を

### こう考える



一 可能性の問題？  
都市は人間が作った世界。そこに人間が生きている限り生活はある。生活がある限り生活科は成立する。可能性は」との編集部の問いには、すでに全国の都市の小学校で生活科は実践されている、と答えざるをえない。  
ただし、「確立」という言葉にこだわると答えは変わる。辞書には「確固としたものにする」とある。また、なることとある。この意味にしたがえば、私の答えは、半ば肯定、半ば否定。  
まず肯定の理由から。

#### 生活科は都市型生活が母体

これが私の生活科観だからである。生活科は子どもの生活が都市型になったからこそ生まれた教科である。  
改めて生活科の目標を思い出してほしい。なぜ「具体的な活動や体験」が必要とされ、自分と身近な自然や社会のかかわりや「自分自身や自分の生活」を考えなければならず、「その過程において」と断り書きをつけて「生活上必要な習慣や技能を身に付けることが問題になるのか。何よりも、なぜ「自立への基礎を養う」という他の教科にはない総合的(曖昧?)な目標が掲げられているのか。

少子化が加速度的に進行し、ポストモダンとプリモダンを錯綜する脱イデオロギーの時代、これが生活科で育つ子ども達の活躍する舞台なのである。  
都市は、都市的生活様式の洗礼を早く受けた分、その問題を克服するノウハウもまた非都市より豊かである。既に、都市的文化に覆われた子ども達の生活に、「遊び」と「学び」と「育ち」の世界を創造する活動を展開しているグループはかなりある。生活科に期待する声も高い。都市住民こそ生活科を支えるネットワークの温床である。

#### 三 問題は生活科ではない

最近、国語の授業を二つ見る機会があった。私の研究室の学生が教育実習で行った授業である。一つは二年生の詩の学習。白菜を母さんが漬ける姿を表現した「はくさいぎしぎし」という詩が学習対象である。教科書には「ようすや 気もちを 思ううかべながら よみましよう」とある。  
だが、子どもは白菜の漬け物は知っていても、それを漬けるのを見たことも経験したこともない。その彼女らが「ようすや気もちを思いうかべ」る世界とはどのようなものだろうか。学生が準備したのは漬物桶と白菜と塩と重し。子ども達の前で漬物を漬ける

大人には「便利」で「安全」で「清潔」で「健康」で「効率」のよい都市的生活様式も、そこで生まれたヒトには、人間になる過程に必要な「学びと育ちの場」が失われた世界になることに気付いたからではないか。自然と社会の過度の統制と操作は、ヒトが自ら立って生きるために必要な力を身に付ける機会を奪ってしまうことに気付いたからではないか。ヒトは人の間でしか生きられず、ヒトもまた自然の生き物であり、ヒト以外の自然と共に生きること、はじめて人間たりうることに気付いたからではないか。  
生活科は都市型が本来の姿。可能性の問題ではない。ただし、生活科は非都市型(農村型?)の方が実践しやすいとする声があることも否定できない(この発想自体が生活科の都市性の証明)。だがこれは錯覚である。

#### 二 問題はどこに

私は十年近く静岡県内をフィールドにした生涯学習調査を続けてきた。その経験から、第一次産業が未だ主要産業である町村部こそ、子どもの遊び空間は貧しい、といわざるをえない。  
小さな広場はある。だが、その多くはゲートボール場。過疎の村は超高齢社会である。山や川や田畑があるのであるから授業を始めた。  
もう一つは「飛び方のひみつ」というトンボの羽の動きを解説した文が教材。4年生の説明文の学習である。  
だが、トンボを鑑賞でしか見たことのない子ども、あるいは飛ぶ姿をたまたに見かける程度の子どもは、次の文章をどのように理解するのであろうか。  
「……晴れた日に、上空に目をやる

と、まるで空中散歩を楽しんでいるような、とんぼのむねが見られます……とんぼは空中に停止することも、そして急に飛び立つこともできます……なぜ、こうした器用な飛び方をするのできるのでしょうか。」  
学生が用意したのは、教科書に掲載されたトンボの飛ぶ姿の分解写真を大きく描きなおした絵と自由に羽が動く一メートル近いトンボの模型。数種類の図鑑を参考にして徹夜で制作したものの。トンボの羽を動かす経験を子ども達にさせたかったからである。

このような授業創りの基盤は、教科書の作品が指し示す世界が、現代の子ども達の生活には既に失われて存在しないという事実である。そして、学生もまた同じ世界で育った若者である。  
それゆえ、文字を読むだけでは想像できない子ども達の悲しさが理解できない。だから、白菜を漬ける準備をし、

は、というのは都市人の発想。  
都市のオフィスで子どもが遊べないように、収入源の田畑に子どもを入れる農村はどこにもない。川の多くは、恒常的な用水の確保と蚊や蠅の発生を防ぐために暗渠。薪を取らない山に子どもが入る隙間はない。舗装された農道には歩道がなく、一家族当たり二〜三台の車がその上を走りぬける。  
逆に、私が住む大学の官舎は静岡市の中心部にあるが、子どもの遊び場はむしろ豊富。小さなテラスの花壇に根づいた四季折々の雑草。昼間の駐車場はローラースケート場。学校から帰ってきた子どもが、各棟を上下に移動して仲間を募り、コンクリートの道をコートに変えてドッチやテニスで遊ぶ。  
その子どもを、かすがい」に大人の間にコミュニケーションが生まれる。

生活科の実践を妨げるのは都市でも農村でもない。人が生活する場には必ず自然があり、人と人のつながりがある。問題はそれを見いだす意味づけを換させる教師の生活(科)観と実践。  
生活科が必要とする自然と社会は、兎を追った野山でも、ムラの共同性でもない。貧困と病苦と迷信の世界であったことを忘れた、過去の美化と郷愁では、二一世紀の人間が必要とする力を育む場を用意できない。超高齢化と

ハリボテのトンボを作ったのである。何れも生活科の発想と実践を生かした学習活動ではないか。

都市型社会の問題は、生活科ではなく、他の教科にこそ向けられるべきである。生活科はその問題解決のためのヒントを無限に提供するであらう。

#### 四 生活科に「確立」はいらぬ

最後に半ば否定の理由を述べておきたい。それは、「確固としたもの」になつたとき、生活科はその最も重要な部分を失う恐れがあるからである。  
生活科の生活とは、教師ではなく子ども達の生活であるはず。だが、現代の子どもは多様であり、その生きる世界は常に変化している。多様性と可変性こそ都市型社会の特性だからである。それ故、多様に変化する子ども達の事実とともに、創り続ける授業」が、都市型社会が必要とする生活科である。

逆に、確立された方法と形式にしたがって生活科が実践されるようになってくると、子ども達は、自分達の生活とは異なる世界の問題として、生活科という教科を勉強するようになるであらう。その時、子どもと学校の日常は再び分断され、「はくさいぎしぎし」と「朗読」する子ども、声」のみが教室から聞こえてくるであらう。

# 私の生活科勉強術 —実力がつく研究法

←特集ガイド



生活科にとって今どんな研究が必要か—と聞かれたら

高浦浩・富樫裕・森隆夫

生活科の未来をどう描くか

◆全国生活科ホットライン情報

9

生活科は教育界のリストラフになりうるか

藤田 静作

幼児早教育論者に打ち勝てるか

伊藤 隆二

都市型生活科確立の可能性はあるか

馬居 政幸

実践の多様化・個性化は広がるか

高浦 勝義

わが校はなぜ「生活科」の看板を下げないか—ただわが校の特色はいい

わが校の「散歩」「あそび」と生活科はどこが違うか

飯沼 慶一

わが校の「しごと」と生活科はどこが違うか

小幡 肇

わが校の「総合活動」と生活科はどこが違うか

高橋 利夫

生活科実践研究の今—現状をレポートする

授業を研究するなら「この本」—私の推薦ベスト5

中嶋多佳子/江島敏幸/加藤愛二/本名 武

授業を見に行くなら「この学校」—私の推薦ベスト5

関 隆一/森下規代子/岡本哲生/川村 正

授業で使うなら「この教材・教具」—私の推薦ベスト5

城島周子/吉田富美子/二見美佐子/大江 祥

生活科の問題提起—到達点をどう考えるか

35

教科観はどう確立したか

木下 繁彌

子ども観はどう変わったか

有田 和正

環境づくりの技術はどこまで開発されたか

松本 康

生活科主任のための「もの知りガイド」

44

教材開発の技術はどこまで開発されたか

木下邦太郎

単元づくりの技術はどこまで開発されたか

椎名 仁

指導案づくりの技術はどこまで開発されたか

佐藤 真市

学習活動構成の技術はどこまで開発されたか

馬野 範雄

授業検討の技術はどこまで開発されたか

津川 裕

評価研究の技術はどこまで開発されたか

日台 利夫

生活科主任のための「もの知りガイド」

58

情報の集め方・選び方のコツ

内藤善康/白川けいこ

地域ウォッチングのコツ

筒井寿夫/大内美智子

学べる授業の見方・考え方

横山秀子/佐藤直美

生活科の研究会・研究団体

星村 平和

わが県の生活科研究動向

68

生活科実践研究の現状

二重/岡山/長崎

素振りして自己研修

66

こんなことある相談室

5

評価のし方

嶋野 道弘

クロスワード化を招く作品主義からの脱却を

家光 大蔵

生活科研究のポイント

70

生活科号のゆくすえを探せ!

片上 宗二

これは便利すべし使える生活科カード

中野 重人

コピーOK教材

76

1年・子どもを励ます表彰カード

小田原誠一・坂本正彦

2年・子どもを励ます表彰カード

善野八千子・上田俊宏

表紙3・4/子どもの作品紹介

84

表紙アサイン・カット

飯島英明

●新連載で理論に強くなる!

●情報があふれている?今日、ホントに自分に

役立つものを見分ける嗅覚のきたえ方を暗示する!

